

第1回「ガーデンシティ函館」検討懇話会 会議録

【開催日時】 平成28年5月12日（木） 15:00～17:00

【開催場所】 函館市役所8階大会議室

【出席者】 委員）木村委員（座長），菊池委員，折谷委員，岡田委員，
渡辺委員，松崎委員，齋藤委員，高田委員，安立委員

オブザーバー)

函館開発建設部道路計画課 坂本道路調査官
渡島総合振興局函館建設管理部 青柳道路課長

函館市) 企画部 (事務局)

種田部長，田畑計画推進室長，竹崎新規政策担当課長，
横川新計画担当課長，木谷主査

土木部

小笠原施設管理課長，榎本道路建設課長，
山本公園河川整備課長

都市建設部

長谷山景観政策担当課長

経済部

中村中心市街地担当課長

- 【次第】
- 1 開 会
 - 2 挨拶 函館市企画部 種田部長
 - 3 出席者紹介
 - 4 議 事
 - (1) 本懇話会の設置について
 - ・事務局から説明
 - (2) 座長選出
 - ・公立はこだて未来大学木村教授を選出
 - (3) ガーデンシティ函館について
 - ・事務局から概要説明
 - (4) 意見交換
 - ・以下のとおり
 - (5) その他
 - 5 閉 会

議事（4）意見交換 発言要旨

【木村座長】

事務局から資料の説明を頂戴しました。これまでの経緯、市の考え方が説明されましたが、この内容についてご質問・ご意見を頂戴し、意見交換に入っております。

このガーデンシティというキーワード自体は、通常の田園都市に直訳されるいわゆる住宅政策です。今回対象として考えている地域については、これから新しくニュータウン作るだとか住宅政策しようということではなく、「ガーデンシティ函館」という新しい言葉だと考えていく方がいいのかなと思ったところです。

また、幸いにして西部地区の整備が20年以上の取り組みがあって、他の様々な都市よりもかなり豊かな議論が出来るような前提条件にあるということ、ここでは踏まえておく必要があると思います。

まずこの「たたき台」については構想という事で、市議会の答弁だとか新聞記事の中で断片的に聞くのではなく、こうした「たたき台」として読めるような状態を作っておりますので、これに関して何か感想などをいただけますか。

【安立委員】

まず、この表紙の写真がバンクーバーということで、素敵な街並みではあるんですが、やはり函館の中でのガーデンシティって事だと、ここにちゃんと函館らしさが入っていてほしいなと思います。素敵な函館の持ち味を盛り込んだ、函館ならではのものが出来るといいなと漠然と考えておりました。

例えば、赤レンガ倉庫群のところにフラワーバスケットが沢山並んで観光客の方を迎えているのですが、函館に来た友人は凄く綺麗だと言ってくれましたけれど、あのバスケットもどこにでもあるというか、花の種類などで函館や北海道らしさがもう少し出てくると、よりグレードアップ、質が高くなるんじゃないでしょうか。この表紙の写真を見てそれを思いました。

【木村座長】

これは多分「たたき台」だからということもあったと思うのですが、表紙の写真でだいぶ印象変わりますよね。ビジュアルイメージで変わるとは思うのですね。なので今回かなり思い切って選んで頂いたのかなとは思ってはいますけど。

岡田さんは、函館の顔の観光ポスターを作っていますが、どういったビジュアルであれば函館らしさや北海道らしさが出てくるとお考えなのか、印象をお聞きしたいと思います。

【岡田委員】

私は、グラフィックデザイナーとして、主に観光ポスターだとか広告の見た目を整えたりする仕事をしていて、3年程前と5年前の観光ポスターを製作させていただきましたが、ポスターを見た人が、実際自分の目でその風景を見てみたいと思っていただけるような写真を使うというのが私の中の一つのガイドラインであり、その時に函館のどこを切り取るかというのはそれぞれの考え方あります。

私は出身が函館ではなく、帯広の方の新得町という特に何も無い田舎町の出身なのですが、そこから20年程前に函館に出てきた時にこうした仕事をさせてい

ただきいろいろ見てみて回ると、函館は切り取るべき所がたくさんあるんです。簡単に言うと絵になる風景が、何もしなくても絵になる風景というか、私が函館に来た20年程前からあちこち見ても、その前にいた札幌と比べても、函館の切り取るべき風景がすでに沢山あってもう選べなくなるくらいで、その中からチョイスしていく作業を毎年してるんですが、その中で函館の美しい街の風景を、皆さんが思っている函館の美しい街とちょっとアベレージを変えたものをポスターに使っているというのが今の私のやり方です。有名な八幡坂とか函館山からの景色も勿論美しいのですが、その他にもいっぱい函館市内で美しい風景があるというのも、もう一回函館市民が見ても再発見できるっていうのが、函館の懐の深い所なんだろうなと私は感じています。

【木村座長】

今、「たたき台」に対して議論を始めようとしていましたが、これについては一定のご理解をいただいたということで、次の議論に繋げていくということに進めさせていただきます。

岡田さんからは、函館はどこからどういう風景を色々切り取っても非常に魅力的な場所が多いというお話、それを著名な場所でもなくとも函館の顔としてビジュアルイメージとして、観光客に対しても充分アピールできる資源が沢山あるというご指摘をいただきました。

高田さんからもお願いします。

【高田委員】

僕は建築のデザインが専門で、大学で学び本業でも実践しています。

今回のガーデンシティ、これは先ほど木村座長から定義されましたが、本来は都市計画のようで、実際は少しニュアンスがだいぶ違う、理想的な人口計画ですとか施設計画を指し示す言葉で、多く建築の世界では使われる言葉ですが、仮に新しく定義されたガーデンシティ構想の中で、一番重要なキーワードになってくるのが、デザイン性の高いという事が色々節々に配置されていたと思うんです。

デザイン性、というところのデザインはものすごく幅の広い解釈ですので、どの辺りのデザインに狙いを定めていくのか、それが大きく分かれた4つの地域ごとに適したデザインのやり方もあると当然思いますし、私は現在大門地域で設計事務所も構えてますが、西部地区の古き良き街並みというのは、当然可能な限り守り抜くべき対象であって、これ以上は欠番といいますか欠落を防いでいく努力もデザインなんですね、その保存の為のデザインだと思います。

もう一つは、都市は西部地区が栄えたおよそ100年前で終わっている訳ではありませんので、現代の新たなデザインということも同時に許容していくような土壌というのは当然必要になろうかと思えます。それは、特に駅前地域や五稜郭地域などの現時点で中心地として認識されるであろうエリアに対しては、非常に最先端のデザインワークの取り組みが一方では必要なんじゃないかなと思っており、イルミネーションなど様々な提案をさせていただいています。

その背景には、もちろん今後函館のような地方都市は人口減少が5年後、10年後に深刻な問題として待ち受けていることが目に見えています。

私もかつてそうでしたが、18歳の頃までは函館で過ごしてすぐ東京に行ってしまう訳です。東京というのは若者を惹きつける訳です。何かカッコ良いし何か最先端だし何か面白い物があるな、東京で手に入らないものは世の中に多分無い

だろうってというような幻想で行くわけです。でも20年位暮らしてみると東京には何もないなということに、ふと気付くわけです。でも若い世代はどうしてもそういう幻想を追い求める部分がありますので、それは否定しないのですが、若い世代が留まれるような先進性、カッコよさ、若い世代が望んでいる街の姿というものを、それこそこのデザイン性の高いというキーワードの中に、ある地域に関しては積極的に取り組んでいくような事がすごく大事なんじゃないかなと思います。

私もデザイン事務所を経営しておりますけども、やはりいずれは未来大学の学生ですとか、そうした若い世代をうちの事務所に招き入れたいわけです。未来大学の学生はどうしても9割方首都圏に就職していると思われまますので、そうした若い世代を少しでもこの街で育て上げられるような、そんな魅力のあるデザイン性ということも、今回のガーデンシティの中では盛り込んでいけたらいいなと思って聞いておりました。

【木村座長】

折谷さんには、よく行政でやるアダプトプログラムですね、共同まちづくりの話になるのですが、今取り組んでいらっしゃる事がたぶんガーデンシティを考えていく中でキーになる一つだと思っているので、そういったことを含めてご紹介いただければと思います。

【折谷委員】

美しいまちづくり検討会に参加した際に、「美しい」というのが抽象的な感じがしていましたが、その後会議を重ねて最終報告書を見ましたら、今となっては美しいと言うのは、本当に力強い言葉なんだなと思いました。

このガーデンシティについては、どういうイメージなのかなと思ってきましたら、見て歩いて感じて楽しい美しい街づくりであると。それは庭というかまち全体が公園みたいなのかな、というイメージをしながらやってきました。

今日ここに来る前に函館駅に寄ってきました。例年なら6月に入ってから中旬位に花がいっぱいになるのですが、今年は4月に入ってから花を植える事が出来たのでパンジーの花でいっぱいになっておりました。今日はお天気が良かったんですが風があるのでどうかなと思いましたが、その風の強い分、パンジー一本の香りが信号待ちで待っていてもすごくいい香りができて、函館駅前には風が強いけどもこのお花の香りも伝わってきてすごくいいな、やっぱり早くからお花があるっていいのはいいな、と思いました。

私は、国道や道道でお花の活動をしています。函館新道は13年目、空港線のお花の活動は今年11年目になります。函館にいらっしゃる多くの観光客の方が函館に着いた時に旅の疲れを癒されたり、函館ってすごく綺麗な街だなって花で出迎えたいという気持ちをもって、当初から活動をずっと続けてまいりました。

最初は訪れる方のために始めたんですけども、今は住んでいる方がすごく快適に感じているんです。やはり自分達が住んでいる所が綺麗になるっていう事は、子供達も学校に通ったり、通勤でもいろいろな方が通る時に、やはり気持ちがよく、本当に疲れも癒されます。花の時期がメインですが、これから土起こしなど準備をしていく中で、整備している姿を地域の方が目に見ると、そろそろ新道の活動が始まるんだなと、住んでてすごく快適になって元気になって、そして住んでる方同士も仲良くなって、そこにコミュニティ自体が何か健康的で元気になる

街づくりに繋がっていったるのではないかと考えています。ただ活動が長くなるといけますと、やはり皆さん高齢になって体のあちこちが痛くなったり、参加率が下がってきますので、長く続けるためには、小さい頃から子供達や学生を巻き込んで息の長い活動に出来るような仕組みが大事ではないかと考えています。

私たちが活動する場所は自分達の庭ではなくて、国道だったり道道だったり駅前だったり市道だったり、必ずその管理者がおりますので、行政の出来ることと作業する私達が出来ることとの関係が上手くいきまして、やはり一方的な全部町会さんとか街づくり団体でやって下さいって言うても出来る事と出来ない事もあります。まずは皆さんが出来るような体制を作っていくって言うような函館市内の重点エリアが出来ますと、行ってみたくないのでないでしょうか。

五稜郭公園の桜が満開になると皆五稜郭公園に行ってみたくて思いますが、毎年行ってみたくなる場所として、駅前・大門・西部地区・湯川・五稜郭などたくさん出来れば、市民も何度でも足を運びたくなる、というのがガーデンシティの目指すところで、住んでる方も函館に住んでて良かったなと思えるのではないかと考えました。

【木村座長】

私もサービスの享受者として通りを通る度に、ここを歩いて街に入っていくなど感じるようになってきて、そこで自分の居住まいを直すというか、タバコを捨てる人も減ったりとか、ただそこにお花があるというだけではなく、そこから波及するいろいろなことが起きてることを実感していたので、今ご説明いただきありがとうございますと思いました。

一昨年「中臨港通り」に「開港通り」という道路名を名前をつける機会があり、この開港通りをガーデンシティのなかで整備すると新聞報道があったので、命名に汗をかかれた齋藤さんにご発言いただきたいと思っております。

【齋藤委員】

函館国際観光コンベンション協会では、「中臨港通り」という駅前から朝市の前を歩いて国際ホテルの前を歩いて西部地区に抜ける通り、観光客が一番多く通る通りだと思っておりますが、西部地区の方に行くとなると非常に綺麗になっているんですけども、朝市からそこに行く過程がなんとなく殺伐としており、まず名前をつけたらイメージから街や通りが変わっていくんじゃないか、ということで、観光コンベンション協会の委員会で提案させていただきました。それが実現することになって名前がついたら道路整備に予算までつけてもらえるという、今のところ思ったような展開に進んでいますが、このガーデンシティの構想を聞いた時に、街全体というよりも道の事なんじゃないかという思いで、特に私の場合は経営するホテルが開港通りに面している部分もありますので、その道がきれいで良いものになっていくと観光客ももっと喜ぶのではないかと感じております。

それで、市長が欧米の街並みとよく言っておられるようですが、函館というのは、まさに日本でも有数の欧米の街並みが似合う街であり、早くから欧米の文化も取り入れて実際に洋風の建物ですとか、日本の中では函館と長崎、あるいは開港した横浜みたいなところなのかなという様な気がしますが、そうした街並みをもっともっと函館に出来てくれれば、観光都市としてのステータスも更に上がるのではないかと考えています。

ただ、私自身はデザイン家でも建築家でもないもので、どうしたらよいのかは分

からないのですが、これは、やっぱり一番最初に出ているバンクーバーの通りとか街並みですよ、これがバンクーバーなのかサンフランシスコなのか他のヨーロッパの色んな町のどこかなのか、そこを目指そう、という形になればイメージしやすいのではないかと思います。残念ながら私は漠然としたイメージしかありませんが、こういう写真などもイメージもつけやすいので、これはいいなという場所から、開港通りだけじゃなくいろいろな街に当てはめて作り上げていければと、そんな感じだと思います。

【木村委員】

「たたき台」の中で五稜郭地区で電停から五稜郭公園への誘導という例示があるんですが、表通りの方は本当に先進性があるって、メイン通りの部分は遥か昔に電柱もなく、パブリックアートもあり、歩道はブロックがきれいに張ってありというような非常に良い環境を作っているんですが、残念ながら上手く運用されていないと感じています。そこに住んでる方達の関与は非常に大きくて、全部行政に頼るのはどうも変だなと思いつつ普段は歩いています。行政的に言うとアダプトプログラムって事になるんですが、アダプトって直訳すると「養子」という意味なんです。行政が民間に何かを養子に出す、というイメージなので、本来のプログラムの意味合いとしてアダプトって言うんではあるんですけども、基本的には今回の構想の中でも、イメージの中で市が行うべきこと、連携して国や道が行うこと、そしてもう一つ大きなところに協働・補助・委託といったキーワードがありますが、町会の方、市民の方、商店街の方との連携がどうしても必要なんだと。それがなければ、やはりずっと税金を投じながら、せつかく良いものを作っても、それが持続的に上手くいかないといったことが、今回の構想の中にあっては本当につまらないというふうに思っています。それでこの連携の部分ですが、松崎委員から町会としての関わり、非常にまだ難しい部分があるとは思いますが、感想などありましたらお願いします。

【松崎委員】

西部地区には20程の坂があると聞いていますが、今の観光客は裏道を観光して歩く観光客が多いと聞いております。それで西部地区のせつかくの坂道、高齢化時代ですから坂道に住む方はいらっしゃらないって風になっていくと思うんですが、やはり坂から海を見たときのイメージが違ったものが見られると思うんです。そこにまた季節的な一年草ではなくて木を植えるなど、坂を活かした観光というのも一つ考えてみてはと考えています。

また、これは余談ですが私飛騨高山の方に3度旅行しましたが、派手な町ではありませんが一人で足が進む町なんです。引き寄せられるその町の雰囲気です。また本当にゴミの一つもなく、もう少し歩いてみようという気持ちにさせてくれました。函館も、表面的な観光地やマップに載ってる場所よりも、西部地区の坂や裏通りの方をもう少し力を入れてやってほしいなと私の個人の感想です。

【木村座長】

渡辺委員から商店街からの観点で、この構想に関するご意見を頂戴したいと思います。

【渡辺委員】

美しいまちづくり検討会のメンバーでしたが、その中で西部地区・駅前大門地区・本町五稜郭地区・湯川地区というエリアで、コンセプトやイメージについて皆さんとお話してきましたが、今回はそのイメージに新たにガーデンシティ構想としての肉付けをするというような感じで捉えています。

部門的にいえば、エリアイメージの函館駅前大門、私が今現在商売やってる所ですが、ここが今アーケードを外して電線の地中化を始め、歩道の整備、照明灯と進められます。これが全部かと思ったら、東雲小路の整備や高砂通りの整備まで考えていただいているというのは非常にすごいなと、15年というスパンだから考えられると思いますが、もし市に余裕があれば、若松広路も考えていただければ完璧じゃないかと。あの場所は自由市場があり、昔は広場でイベントをやったりサーカスやったりと大門では中心の場所なんですね。昔は駐車場もあつたりと道路もかなり広いですから、あんなに広い通りをもっと活用しないと勿体ないんじゃないかと思っています。15年のスパンですから範囲を大きく広げて、例えば五稜郭地区でも十字街でも湯の川でもある程度範囲を広げたり、もうちょっとグレードの高いとかお金かけられるような街づくりの方向性を考えていただければありがたいなと。我々はそのに対しての意見だとここで言えると思いますので、この「たたき台」は非常に良いんですけども、各指定されたエリアがもうちょっと具体的にグレードアップされるような政策というか「たたき台」を考えていただければ、我々の意見を出しやすいんじゃないかなと思います。

【木村座長】

美しいまちづくり検討会の話が出たのですが、「美しい都市空間の形成を目指して」という報告書は、平成24年10月に提出したのですが、今回の「たたき台」では、エリアイメージの中で各地域ごとのエリアを繋ぐ「通り」についての言及があります。美しいまちづくり検討会の報告書ではその「通り」に関して言及させていただきました。この中には、現在の開港通りの話や、国の方に色々これからご協力を更に頂かなければならないのかもしれないかもしれませんが、漁火通りの話ですとか、道路の一つひとつについても考えを巡らせた時期があったということとはご覧いただきたいなと思っています。

エリアだけではなくて「通り」ということを、今回の構想の中では議論することになるので、過去の検討会議でいろいろと考えられていたということを踏まえていただきたいというのが、座長としてのお願いです。

それから、函館市緑の基本計画が平成13年に作られており、函館市の都市計画マスタープランとの整合を図りながら、平成27年までに一つの区切りをということでその後改訂されてると伺っていますが、その中でもかなり詳細に政策について言及されています。

そうした中で、函館市として今回あえてガーデンシティ函館を進める意味合いを考えていて、これは美しいという言葉なり何らかの言葉を新たにくっつけて、はっきり今までやってきたことの位置付けをしていくことだろうなと。その上でより多くの市民の方にこうした構想が進んでいくんだという基盤があつて進めていくんだということを、はっきりわかるようにしていく必要があるんだろうなという議論をここで出来ればいいのかと、今ご意見伺いながら思い始めたところなんです。

菊池委員の論文を読ませていただきましたが、この会議の一番のキーパーソン

の一人だなどと思っています。函館には非常に立派な公園もありますが、近隣住区、街区の中にいくつか小さな公園作ったりしてきたことについての言及がないんです。公園や街区の整備の観点からガーデンシティをどう捉えたらいいのか、菊池委員からコメントをお願いします。

【菊池委員】

近隣住区、いわゆる街区公園等については、去年、一昨年と学生とともに函館市の街区公園の現状調査を実施しました。公園はパークであり、ガーデンは庭です。公園は基本的に住民に対して提供されるものという前提であれば、現状の函館市の公園の状況は、1年の半ばを雪捨て場として使われたり、遊具がない公園も多くみられ、植栽の状況もあまり好ましいものではなかったりします。大通りに面したり西部地区に近い中心市街地の公園は相応の整備がされていますが、観光客も含めて市民も全員が全員大通りや西部地区に行く訳ではないので、街区公園の整備は必要ではないかと思えます。

街づくりもそうですが、生活者と空間の状況そのギャップというか、街に暮らしている人達のために街づくりはあるかと思っていて、地域資源に関する研究や、今では子育ての街づくりを研究していますが、生活のための整備をすることがまずは観光客よりも先ではないかと感じます。

私は函館に来て3年目ですが、それまでは横浜にいました。出身は九州で、大学が東京で、横浜の大学に勤めていた関係もあって横浜にもいたんですが、横浜が良いとか悪いとかではありませんが、横浜は横浜で完結しているんです。神奈川の人達は横浜に遊びに行きますが東京には行かないです。東京にはいろんなものがあるけれど、ありすぎて何もない。でも横浜はなぜか地元の人に愛されている。そういうのが函館にあってもいいんじゃないかなと思います。

例えば学生にデートはどこですかと尋ねると、カラオケやゲームセンターという言葉が出てくるんです。そういうのがすごくもったいない。地元の若者がデートしたい街、ガーデンっていうのを私の中ではずっと考えていて、ガーデンというのは自分の庭のような、市民にとっての自分の庭であるような街であれば、必然的に外から興味を持って訪問に来るんじゃないかと思っています。

エコミュージアムなど地域資源を利用している街や地域が結構ありますが、やはり点で終わっている所も多くて、キーワードに回遊性という言葉もありましたが、自分の庭を歩くような気持ちになるような函館になったらいいなと思っています。

【木村座長】

デートができるって大事なキーワードですね。横浜の話が出てきましたが、安立委員は、函館らしさとか北海道らしいガーデン、自分の街だったり自分の庭になり得る庭のイメージってどんなものとお考えですか。

【安立委員】

私自身はずっと東京にいて、7年前に函館が好きで移住してきました。本当の函館らしさを常に求めて、東京にもあるんじゃないかっていう場所よりは、自分の中ではここが函館らしいというイメージがあります。観光の情報提供の仕事に就けたので、自分自身はまだ永遠の旅行者のような気持ちで、あちこち魅力的な場所を探してお伝えしております。

美しいまちづくり検討会の報告書を見ると、答えがかなり出ているなどと思って改めて拝見してました。函館の街らしさという点、まず観光客としては市電の存在はかなり大きいので、函館駅から十字街に向かう道はポイントになります。乗るだけではなくて、観光客だと20～30分歩くのも全然平気ですので、あの道を歩いて十字街に向かう途中でどンドン電車が追い抜いていったり向こうから来たり、そういう空気感っていうのが自分としては函館らしいと思いました。やはり駅前、電車通りは、空き店舗や空き地が多くて賑わいをあまり感じられなくなってきているので、電車通りと路面電車のある賑わいの風景というところが、一つポイントであるといいなと思いました。

仕事で色々な街歩きなどを紹介するなかで、非常に人気があって絵になる場所は、港が丘通りやラ・コンチャの前の通りです。和洋折衷の建物が並んでいる通りや大三坂などは、紹介するととても人気がある記事になります。ただそれも写真としては部分的に2～3軒を撮るだけだとすごく綺麗なんですけど、その周りという点やはり空き地があったり、逆にとても近代的なビルが建っていたり、街並みというよりは絵になる建物を繋いで拾い集めて、他はちょっと目をつぶって歩くような感覚になってしまう。和洋折衷の建物を軸にして、もう少し線や面をつなげていくような事も出来たらいいですね。この辺が具体化していけば、かなりクオリティーの高い街になってくるかなと思います。

【松崎委員】

市としては、今の観光地を広げずにこの状況の中で変化をみたいというお考えでしょうか。

【事務局】

このガーデンシティ函館自体が、既存の観光資源に新たな魅力を付加しながら街の魅力を高めていくことが基本的な考えと思っています。

観光地を新たに作り込むということではなく、街全体を楽しんでもらうなかで新たな街の魅力を発見してもらうことで、結果として新しい観光地が出来てくるというのがあるかもしれません。

【木村座長】

松崎委員のご質問は、エリアの捉え方の話だと思うのですが、従来は観光資源化したところを中心にしてきましたけれど、これは菊池先生がお話されましたが回遊性がポイントになっていて、外からいらした方とか市民も含めてですが、歩いていくと次々と美しい景観が出てきたり、面白い店が出てきたり、ポケットパークがあったりと、いろいろなことを誘発できるような連続性のある環境を作っていく。そうすると自然に交流人口とされている人達も含めて、そこに留まったり消費活動したり、また思い出を作ったりデートしたりというような活動に繋がっていくということが出来れば全市的にどこでも波及していく。1泊だったのが2泊になり3泊になりとなるといいなっていうのが、我々市民としては思うところなんです。

少し具体的なイメージの話をしていきたいと思っています。花を綺麗に見せるほかに、野草のようなものを植える、いわゆるイギリスガーデンのようなものは、北海道の風土を反映した庭づくり、特に帯広や美瑛などで行われていますが、そうしたものは函館のイメージと合い、実現可能なのでしょうか。

【折谷委員】

函館駅前では、ハーブを植えると風ですごくいい香りがしており、ハーブや野草を市内でもたくさん植えていただければいいなと思いますが、野草のような種類は、自然的な感じの色であり濃い色はないので、色彩的な統一感からすると、函館駅や函館空港など人が降りた時に、パッと入る視界とか感覚的にはある程度カラフルの色の物がそこにずっといるわけじゃないので、通過移動の時に視界に入る部分に関しては、多少色が付いてる方がいいのではないかなと思います。

国道や道道などの活動では、ハーブですとコストや手入れなども違ってきますが、地域住民としては一年草の方がいいのかもしれないです。

ボランティア活動ではなく個人的に花の好きな人、例えばバラがすごく好きな人は、自分の庭がイギリス領事館のようなバラばかりという方がたくさんいて、そうした方が、自分の庭を自慢したくて色んな方に見て頂きたいのでオープンガーデンに参加されています。

函館道南では4～5件しかないのですが、無料の所もありますし、有料の所は庭を見ながらお茶を出したりしています。美幌や恵庭などでもオープンガーデンには参加している方がたくさんおり、バスでそのオープンガーデンのそれぞれのご自宅を見に行くコースもあります。ガーデンシティ函館は、函館の街全体がオープンガーデンのように、有料ではなくていろいろな方が来ていただけるようなオープンガーデンなんだと思いました。

ハーブや野草については、電車や車の窓から香りが入ってきたりすれば、西部地区などはすごく合うのではないかなと思いますので、どこかで取り入れていただければ。ただ、野草は手を掛けてないようですけども、ちゃんと手を掛ける人がいないと雑草なのかハーブなのかわからなくなりますので、そこは専門家にきちんとアドバイスや指導を受けながら場所を選んでやってみてはどうかと思います。

【木村座長】

オープンガーデンについて少し説明をお願いします。

【折谷委員】

そんなに詳しくはないのですが、自分の庭に、バラでしたら沢山のバラ、イギリス領事館行かれた事ありますでしょうか、そのバラでしたら手入れの行き届いている見事なバラが、自分の庭、敷地一面にあるんです。デザインもされていて、それを花の好きな方に見ていただくというものです。個人の庭に勝手に入ることにはできないのですが、オープンガーデンをされている人は、その情報を登録したり公開して庭を見せています。

【木村座長】

最近道南いさりび鉄道が開通してから、いさりび鉄道の周辺に芝桜がとても綺麗な場所が出来ました。私有地ですから入れないですけど、春になって色々な花が手入れがされていると散歩しているだけで楽しいのですが、覗くのも失礼ですし、それをルールを作ってやろうというのがオープンガーデンであると理解しています。

バラも非常に楽しみだなと思いましたが、ハーブの香りの話を考えると、かなり高速で通過する方を迎え入れる場所には必要な緑があり、歩いて移動する場合、

更に歩いてゆっくり見て回る場合にオープンガーデンのような素晴らしいものが見られる仕組みもあるというご紹介がありました。

連続性のあるデザイン、ビジュアルとして、あるいは景観形成という意味で、どうやってこの場で提言していくと、わかりやすく市民の方に伝えられるかについてお聞きしたい。

【岡田委員】

車で移動する場合と、歩いてみる場合とでは目線も違うしスピードも違う。

「美しい都市空間の形成を目指して」の中では、湯の川はこういう役割、五稜郭はこういう役割、また移動速度や目的その時間帯などについてもかなり詳細に書かれているのを拝見しましたが、やはりそこには見に来た人がどんな時間帯でどんな人達とどんな流れで見るのか、ということが絞りきれないのであれば、ピンポイントで押さえていくことは出来るんじゃないかという印象でした。

駅から降りて来てパッと見た時に木があるよりも花があった方がようこそ感が出るのかなとか、車や市電で移動するときには足元は見えないから高い木々の方が街並み全体の雰囲気は伝えることは出来るかな、というのはありまして、そういう観点からかなり函館らしい植物とかは必要なんだと思うんですが、今の目的と場所、植物自体の選定が出来るんじゃないかなと思いました。

もう一点函館に来て思ったのが、坂道がすごく広く、何故広いのだろうとわからないまま暮らしていたら、ある日ここは火事があったからと函館市民はもちろん知ってるようなことを言われて、なるほどと。また、横に並んでる植物も綺麗ですねって話したら、あれはナナカマドなんだと。それは火が燃え移らないように植えられたんだよ、というのを自信満々にお話されてすごく納得したんです。歴史があったからやり始めたという行為が今になって息づいてきて、それを市民が胸をはって誰かに伝えられる、観光客に伝えたり子供とか孫とかに伝えていけるというのも、函館市民が根っこに持つ、函館に住んで誇らしいってところに直結するんじゃないかな、という印象でした。

【高田委員】

答えになるかわかりませんが、例えば西部地区の和洋折衷と言われている様式も、ある時期の流行りだったと思うんです。こんな家見たことないよ、おまえの家かっこいいな、俺も真似したい、というのがどんどん繋がって行って、今の百年も経てば歴史的な街並みとして評価されてきますけども、それが実際生活として使われている時には、ある種の流行だと思うんですよね。

そういう流行が生まれる土壌が、開港当時の函館には確実にあったということなんだと思っているんです。それは類似した横浜ですとか神戸ですとか開港した都市には非常に顕著で、それまでにない異文化というものを、斬新さや目新しさと捉えて受け入れるのが我々の国民性でもありますから、非常に上手に受け入れて我々の文化にまで昇華させた結果だと思うんです。

それを今の時代に生めるのかどうかというのが一番の今後我々の課されたミッションなんじゃないかなと、自分では大風呂敷広げては思っています。それをどうやって生めるのかというと中々難しいんですけども、例えば、現在の函館は、観光地は観光地として成立していますし、居住地は居住地としてかなり距離をもって両極端な形で成立しています。

ビッグデータを活用したある人物の研究では、非常に上手くいってる都市ほど、

観光で訪れる人間とそこに住まう人間の生活の範囲導線が非常に一致するという、とても面白い実験検証結果があるんです。特にパリですとか名だたる観光都市は実は市民が同じエリアで生活しているという事実があって、僕も数年間横浜に住んでおりました、横浜の人って浜っ子って自慢するくらい自分の街に誇りを持って生きているんですね。観光地として優れている町ですから、そこに住民も住まうって事が一つは非常に重要な事なんじゃないかなと思います。それは議論されてきた都市公園の問題ですとか、オープンガーデンの問題ですとか、自分の所有物、住んでるエリアの所有物であるっていう意識をどうやって持つ事ができるか。

実はデザインの話でも何でもなくて都市計画の話かもしれないですけど、そういった所からは、市役所の横の繋がりの中で、議論していくようなテーマなのかなと思います。

一つだけ「たたき台」の中で非常にちょっと気になるなというフレーズがありまして、テーマパークって言い回しはちょっといかなものかなと思います。

これは我々の業界、特に建築やデザイナーの業界ですと、ディズニーランドのような作られたイミテーションの街ということを目指すことが常ですので、そうではない、市民も住まうし市民が誇って住んでいるエリアに観光客も訪れられるような、生きた町というのか本質的というのか、テーマパークに変わるフレーズがちょっと思いつかないんですけども、イミテーションではないということはやはりどこかで我々決意しなければいけないんじゃないかなと思います。

いずれにしても、美しい街づくりの時にも偉そうにコモンセンスになるようにと書いちゃいましたけど、結局はそこなんだと思っています。市民一人ひとりが、自分の街は他の街と比べてやっぱりどこかお洒落だよねとか、どこかハイカラだよねとか、何でもいいんですけど住んでいる事に誇りを持てるようなきっかけをどれだけ用意できるか。真似したくなるような優れたデザインを、我々作り手側がどれだけ多く提供できるか、というところにかかっているなという感じはヒシヒシとしています。

【木村座長】

何かいい感じですね。いい感じというのは、本来市の政策ですから「たたき台」の最後の方に書いてありますが、具体的な実施事業に落とし込んでいった時に、それぞれこれまでやってらした事ですとか、得意な領域っていうのがある訳ですけども、回遊性、連続性のある街並みを形成していくとなると、様々な部局の方が、従来は一緒にやっていたいかなかったことも、同じような理念で取り組むことによってしか実現出来ないような課題がここに横たわっているという意識が必要だと思っんです。

それを懇話会ということで頭にはガーデンシティというのがあるので、例えば高田委員のご指摘に私も同感ですが、テーマパークといった途端にどんどん植えかえたりして、常に綺麗な状態が出来るような本当にシンデレラ城みたいなことになる訳ですけど、シンデレラ城が悪いって言うてる訳じゃなくて、もう永遠に維持出来る財力がこの地域にあればそれも可能かもしれませんが、そうではない持続可能なものをここでは狙う以上、この検討会を通じて言葉の使い方なども、少し精査しながら基本理念の部分も含めて次回以降も議論を深めて参りたいなと思います。

今日のところはここまでにさせていただきます。